

高齢者の薬 どう減らす

高齢者の多くが不適切な薬の処方を受けている可能性が、厚生労働省研究班の調査で明らかになった。複数の持病のある高齢者には多剤投与が行われている実態もあり、薬の副作用で健康を害する例も少なくない。無益な薬の処方では調子が崩せば、さらに医療費、介護費もかさむ。今後、必要な対策は何か。(医療部 赤津良太、社会保障部 辻阪光平、本文記事一面)

■入院中に削減

「薬を3種類減らしまし
た。時々、病棟の様子を見
に行きます」

宇都宮市の国立病院機構
栃木医療センター。内科の
矢吹拓医師(36)は、骨折で
入院中の95歳女性に語りか
けた。60歳代の次女は「こ
んなにたくさん薬を飲んで
大丈夫かと思っていた」と
胸をなで下ろした。

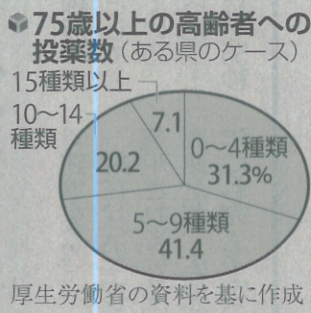
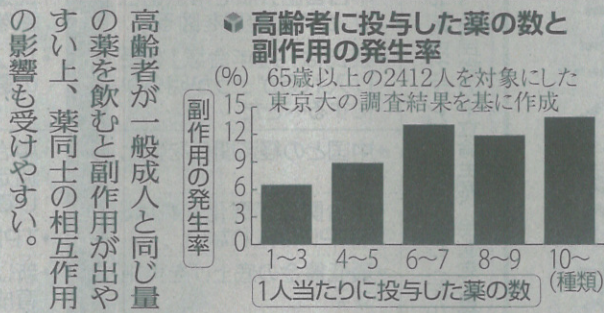
矢吹医師らは今年1月、
同病院に「ポリファーマシ
ー(多剤)外来」を開設、
入院してきた高齢者の薬を
減らす取り組みを始めた。
65歳以上で5種類以上の薬
を飲み、同意を得た患者を
呼び、院内の薬剤師、看護
師らと共同で体調を見なが
ら必要度の低い薬や副作用
のリスクの高い薬を減ら

す。10月までに37人(平均
年齢81歳)を診察。入院時
に平均8・6種類だった薬
が同4・6種類になった。

退院時にはかかりつけ医
に患者の診療情報とセンタ
ー長名で薬の削減に協力を
求める文書を送る。地域の
患者を診る宇都宮協立診療
所の関口真紀所長(60)は
「病院全体の取り組みとわ
かり、診療を見直すきっか
けになる」と話す。

■副作用の背景

総合診療医の徳田安春・
地域医療機能推進機構顧問
は、「特に影響を受けやす
い80〜90歳代の患者が増え
ているにもかかわらず高齢
者特有の薬の作用や副作用
に対する知識が医師の間に
浸透していない」と指摘す
る。薬の代謝機能が衰えた



厚生労働省の資料を基に作成

高齢者が一般成人と同じ量
の薬を飲むと副作用が出や
すい上、薬同士の影響も受けやす
い。薬の代謝機能が衰えた

高齢者は飲む薬の種類が
増える、副作用が起きやす
いというデータがある。近年、
新薬が相次

いで開発され、使える薬が
増えたことも背景にある。
薬局は、薬を処方するこ
とに調剤料が入るため、積

極的に薬を減らすという
動きが起きにくい。
薬の削減に取り組む薬局
もある。首都圏で約140
店を営む調剤薬局チェーン
「薬樹(本社・神奈川県)は
約9割の薬局で医師の指示
のもと、通院が難しい在宅
患者や介護が必要な高齢者
宅に薬剤師が薬を届ける。

「訪問薬樹薬局 保土ヶ
谷」(横浜市)の訪問薬剤
師、高橋麗華さん(38)は痛
み止めなど6種類を飲んで
「薬を出すと、今の仕組みは問
題だ」と小森社長は語る。

多剤投与 副作用増

薬局出すほど利益



パーキンソン病の女性(左)の自宅で、服用の曜日や時間ごとに薬をより分け、説明をする訪問薬剤師の高橋さん(横浜市内で)

「かかりつけ薬局、医師に連絡」 厚労省が 対策検討

厚生労働省は来年度の診療報酬
改定で不適切な多剤投薬を減
らす方針を掲げ、今年度中に具
体策を詰める。
いくつもの病院に通う高齢者
の服薬情報を集めて管理する
「かかりつけ薬局」が多剤投薬
を見つけて医師に連絡する。国
内外の学会などが作成した高齢
者には避けるべき薬のリストを
参考に医療機関が不適切な投薬
を自ら減らしたり他の医療機関
に連絡したりする。などが検
討されている。投薬を減らした
医療機関や薬局への診療報酬を
手厚くする方針だ。
不適切な処方減らせば、膨
張する社会保障費の削減にも結
びつく。副作用の治療費が浮く
だけではない。高齢者がいったん
体調を崩し入院すると、体力が
弱り、自宅に戻れず介護施設に
移らざるを得ない例も少なく
ない。大量に処方された薬の飲み
残しも多く、これを減らすこと
で年間100億円超の薬剤費が
削減できるといふ試算もある。
だが、医師からは「他の医師
の処方にも口を出せない」との声
が根強い。全薬局の7割が医療

「上下関係あり困難」指摘も

機関近くに開設する「門前薬局」
で、どこまで汗をかき薬局が出
てくるかは不透明だ。「医師と
薬剤師は上下関係があり、連携
は難しい」との指摘もある。
徳田安春・地域医療機能推進
機構顧問は「本来はかかりつけ
医が責任を持って薬の調整をす
べきだが、当面は高齢者の薬に
詳しい総合診療や老年医学の医
師が専門外来を作って適切な処
方に変える方法もある」と話す。
いかに実効性のある仕組みを作
れるかが課題となる。
(医療部 米山康彦)



「収益より信頼」

薬の削減に取り組む薬局
もある。首都圏で約140
店を営む調剤薬局チェーン
「薬樹(本社・神奈川県)は
約9割の薬局で医師の指示
のもと、通院が難しい在宅
患者や介護が必要な高齢者
宅に薬剤師が薬を届ける。
「訪問薬樹薬局 保土ヶ
谷」(横浜市)の訪問薬剤
師、高橋麗華さん(38)は痛
み止めなど6種類を飲んで
「薬を出すと、今の仕組みは問
題だ」と小森社長は語る。

だが、こうした取り組み
は一部の薬局で始まったば
かりだ。「薬を出すほど利
益が出る、今の仕組みは問
題だ」と小森社長は語る。

いた神経因性疼痛の90歳代
女性の薬を、医師と相談し
ながら3種類に抑えた。
薬樹は店舗の3割に管理
栄養士を置く。服薬と栄養
面のサポートを通じて、
症状が落ち着き、薬が減っ
た糖尿病患者もいる。薬剤
師の訪問事業は約5年前に
本格化させた。地域の在宅
医や訪問看護師らとの情報
共有を徹底し、往診にも同
行する。「薬が減れば目先
の収益は落ちるが、かかり
つけ薬局としての信頼が得
られ、リピーターになって
もらえる」と小森雄太社長
(51)は説明する。